

トーマス・マン没後 60 年によせて (M. Chida)[J]

教室いっぱいの新入生を前に Ich lerne fleißig Deutsch. Deutsch lerne ich fleißig. Fleißig lerne ich Deutsch. と縦に並べて板書し、発音や語順、動詞の語尾に注意を促す時、「また新学期が巡ってきたなあ」と思う。そして、Wenn ich fleißiger Deutsch gelernt hätte, hätte ich die Prüfung bestanden. と書いて、接続法というラスボスと対面する頃には、1 年近くが経っている。その時点で教室に残っている学生たちは、例文の ich とは違って十分 fleißig な勇者であるから、ほぼ全員が及第する。このお決まりの儀式を長年繰り返してきた私にとって、fleißig という単語には、『魔の山』の永遠のスープのイメージがある——など書ければカッコイイのだろうが、正直に言うと、この単語には、毎年同じ例文を使い、成長なく 1 年を過ごした自分の手垢がこびりついているような気がする。

ところが先日、この単語が、心からの感謝と賞賛を込めて使われているのを見た。 „An Klaus Jonas, meinen bienenfleißigen Bibliographen.“ 1952 年 6 月、77 歳のトーマス・マンが、アメリカ合衆国に別れを告げてヨーロッパに旅立つ直前、見送りに来た Klaus W. Jonas、Ilse K. Jonas 夫妻の労をねぎらって、自分の写真を手渡す際に書き添えた言葉である。

マン研究者は世代国籍を問わず bienenfleißig な人が多い。その中でも Klaus W. Jonas は bienenfleißigst という最上級の形容詞がふさわしい人である。昨年、Dirk Heißerer の編集で、Klaus W. Jonas: Drei Generationen Familie Thomas Mann が、Thomas-Mann-Schriftenreihe の第 10 巻として出版された。1949 年にはじまるマンとの交流、1957 年にチューリヒのトーマス・マン・アルヒーフ最初の利用者となってからの調査研究、1955 年から 1997 年の間に出版された、英語版 2 冊、独語版 3 冊の文献目録(そこには 1896 年から 1994 年の 98 年間に出版されたマンに関する研究論文の一覧が収められている)。さらに、彼が所属するピッツバーグ大学と、Helmut Koopmann が所属するアウクスブルク大学の 1974 年からの交流事業、3 才で渡米、35 才でグリーンカード取得、41 才で市民権取得ののち、1989 年に 66 年ぶりのドイツへの帰郷、所蔵文献のアウクスブルク大学への寄贈等々、この本を見れば、彼の生涯と業績を概観することが出来る。さらに、彼とマン家の人々の間で交わされた書簡とその注釈、マンの孫 Frido Mann と Koopmann の寄稿文からは、マン家の人々と研究者たちの関係や、マン研究の拠点が、アメリカ(イエール大学)、スイス(チューリヒ)、ドイツ(リューベック、ミュンヘン、デュッセルドルフ、アウクスブルク)に広がりつつ集約されていくプロセスも垣間見ることが出来る。

Jonas は Marcel Reich-Ranicki と同じ 1920 年生まれである。1890 年代生まれの Käthe Hamburger (独→瑞典→独)、Ida Herz (独)、Jonas Lesser (奥→英)、Caroline Newton (米)、Hermann J. Weigand (米)、1900 年代生まれの Bernhard Blume (独→米)、Hans Otto Mayer (独)、Hans Mayer (独→スイス→独)、Peter de Mendelssohn (独→英→独)、1911 年生まれの Erich Heller (独→英) などが彼の先達である。Jonas と同じ 20 年代生まれの著名なマン研究者としては、Eckhard Heftrich (独)、Inge Jens (独)、Walter Jens (独)、Herbert Lehnert (米)、Hans Wysling (スイス)の

名が挙げられる。彼の後には 1930 年代生まれの Manfred Dierks (独)、Helmut Koopmann (独)、Peter Pütz (独)、Terence J. Reed (英)、Hans Rudolf Vaget (米)、1940 年代生まれの Hermann Kurzke (独)、Ruprecht Wimmer (独)、Hans Wißkirchen (独)が続く。こうして書き並べてみると、高齢にもかかわらず現在でも精力的に活躍している研究者が少なくないことに改めて驚かされる (それは日本でも同じである)。だが、その中でも Jonas の研究歴は特に長い。彼は Frido Mann に「生まれてこのかた、自分は常に最年少のつもりだったが、いつの間にか最年長になっていた」と語ったという。

マンに初めて手紙を送ったとき、まだ 20 代であった彼は、マン研究の土台となるテキストや文献の収集管理に文字通り生涯を捧げ、マンの息子 Golo にも協力した。最近も、2004 年に Holger R. Stunz と共著で Golo Mann. Leben und Werk. Chronik und Bibliographie (1929-2004) の改訂版、2011 年に Thomas-Mann-Studien の 43 巻目、Die Internationalität der Brüder Mann. 100 Jahre Rezeption auf fünf Kontinenten (1907-2008) を出している。後者は文献リストではなく、シンポジウムや学会の概要、発表者と題目を、時系列で並べたもので、101 年分をカバーしている。ただし、マン生誕 100 年にあたる 1975 年を除き、1990 年代前半までの記述は少なめである。ところが 1990 年代後半から、毎年記述量が激増する。上に挙げた、アメリカとヨーロッパの複数のマン研究の拠点の協力のもと、学会やシンポジウムや記念行事が組織化されたためであろう。その成果はチューリヒの Thomas-Mann-Archiv が出す Thomas Mann Studien (1967-) やリュールベックの Deutsche-Thomas-Mann-Gesellschaft が出す Thomas Mann Jahrbuch (1988-) に収録され、Jahrbuch 巻末には、出版された主要論文の一覧が掲載されるようになった。

マンのテキストに関しては、これまで営々と収集され、大切に保存されていたものが、編集され刊行される時期に入ったといえる。現在刊行中の新しい全集 Große Kommentierte Frankfurter Ausgabe (2002-) には、かつては限られた研究者しか見ることができなかった手稿の書き直し部分や、版による異同、詳細な注、主要文献リストが収録されている。

生前、マンは、Jonas の最初の文献集成 Fifty Years of Thomas Mann Studies (1955) を受け取り、自作が「ライプツィヒから東京、ベネズエラ」、「モスクワ、オーストラリア」で研究対象となっていること、またそれを Jonas が持ち前の Bienenfleiß でもって 1 冊の本にまとめたことを素直に喜んで、Ein Wort hierzu という序言を寄せた。妻 Katja は 1972 年 11 月 16 日付の Jonas 宛の手紙の中で、「彼(トーマス)自身は自作の後世への影響については実は懐疑的で、これほどの文学的な影響力を亡くなってから持つことになろうとは、夢にも思わなかったでしょう」と書いている。さらにその 43 年後の現在、マン研究に携わる人々の働きぶりとその膨大な成果を知ったら、マン夫妻はなんと言うだろう。

マン研究者の国際的なネットワークのもと、組織的に生み出され集められたマン研究は、上記のように着々と目録化されているのであるが、実は大きな宝の山が抜け落ちている。アジア圏におけるマン研究である。Jonas が編集した Thomas-Mann-Literatur. Bibliographie der Kritik の 1 巻目(1896-1955) と 2 巻目(1956-1975) には、1931 年の秋山英夫氏の論文から、1975

年の青柳謙二氏の論文まで、『ドイツ文学(学)』(1947-)に掲載されたドイツ語レジュメ付きの論文を中心に、日本語のものも一部は収録されているのだが、Jonas が Koopmann と共に編集した3巻目(1976-1994)に掲載されているのは古市みゆき氏、小崎順氏、田村和彦氏の欧文の論文にとどまる。序文の中で Jonas は、Thomas Mann Jahrbuch 創刊号(1988)巻頭の Heftrich と Wysling の「トーマス・マン文献は、過去何十年かの中に、専門家ですら把握しきれないほど膨大な数になってしまった」という言葉を引き、中国、日本、韓国の論文を、その数の多さのゆえに割愛せざるを得なかった、と残念そうに語っている。Thomas Mann Handbuch (1990)を見ると、Dierks が「深層心理学」の章で池田紘一氏の論文を挙げているが、「研究史」の章で Koopmann はアジア圏を完全に度外視している。

この欠落を日本側から補う偉業として、『ドイツ文学』国際版 Bd.4.Heft4.(2004)に掲載された小黒康正氏の労作 Thomas Mann in Japan. Rezeption und neuere Forschung と Thomas Mann in Japan. Neue Bibliographie がある。1976 年から 2003 年までの日本語の著書・論文リストと、1901 年から 2003 年までの翻訳、さらに 1925 年からのマン受容史・研究史が、国外の読者にもわかるように明快かつ簡潔にまとめられている。氏の Jonas に劣らぬ Bienenfleiß には脱帽するほかない。しかも Jonas は Bibliograph に徹しているが、小黒氏は一流の Bibliograph であると同時に一流の Forscher でもある。小黒氏の紹介文の後を引き継ぐかたちで、下程息氏と Eberhard Scheiffele 氏の共著 Bemerkungen zur Thomas-Mann-Rezeption in Japan. Am Beispiel literarischer und wissenschaftlicher Publikationen seit dem Zweiten Weltkrieg が Thomas Mann Jahrbuch Bd.22 (2009)に収録された。小黒論文は、全体に偏りなく目配りを効かせ、下程・Scheiffele 論文は、著書限定で個別のテーマを論じ、両者協力して日本のマン研究の多様さと深さを伝えようとしているという印象を受けた。下程・Scheiffele 論文から小黒論文、翻訳・文献リストへと逆に辿れば、少なくとも日本にある宝の山のおおよその姿と規模の大ききだけは、欧米の研究者にも見えるようになった。

小黒論文にも紹介されているが、欧文で書かれた戦前、戦時中のマン研究史としては、『ドイツ文学』24号(1960)のトーマス・マン特集の村田経和氏の論文 Thomas Mann in Japan. Eine bibliographische Skizze がある。1904 年から 1959 年までの翻訳や専門誌掲載論文の統計的な調査結果から、初期短編小説の主人公トニオ・クレーゲルの生き方に共感し憧れる一般読者と、後期長編小説『ファウストゥス博士』、『ヨゼフとその兄弟たち』を好んで論じる研究者、両方が好む『魔の山』、というマン受容の傾向が示されている。戦後しばらくの間、若手研究者の多くが一度はマンをかじる(そして捨てるか、のめりこむ)という時期があったようである。先達の皆様には、当時の思い出を何か書いていただけないかと切に願う次第である。

Thomas Mann Jahrbuch(1988-)巻末の主要論文リストには、これまでに上述の小黒論文、下程・Scheiffele 論文のほか、住大恭康氏、田村和彦氏、高橋輝暁氏、坂本彩希絵氏の論文が入っている。私などが改めて言うまでもなく、日本のマン研究は、歴史が長く水準も高く、

欧米の研究者に新しい視界を開く力を持っている。こちらから日本語という壁を崩すよう心がければ、世界のマン研究はさらに実り多きものとなるだろう。

かく言う私は、新しい全集の既刊分を早くも持て余し(はたしてコンプリートできるのか? 狭い仕事場のどこに置くのか?)、未読の研究書の山にため息をつき(同じものを2冊買っていたりもする)、先行研究の肝心なものを見落とし、日本語の論文を書くのすら青息吐息である。だが、マンのテキストと向き合うと、必ず何かしら新たなテーマが見つかる。たとえ亀の歩みでも、自分の問題意識を大切に一步一步進むしかない。新しい全集の活字が老眼に優しいのだけが救いである。

千田 まや (和歌山大学)

0115

作成日 : 2015/02/26